幼稚園の運動遊びおよび小学校低学年体育で観察される 基礎的運動パターン

吉田伊津美

Fundamental movement patterns observed in motor play of kindergarteners and first and second graders

Izumi Yoshida

abstract

The purpose of this study was to examine the difference in movement that characterize the fundamental movement patterns experienced in motor play across kindergarten and the lower grades of elementary school during physical education class. The objects of study included one public elementary school and one public kindergarten that included a elementary school section. The fundamental movement patterns experienced by the children during classes were evaluated by 19 classroom teachers. The observed classes included 4-5-year-olds of kindergarten classes and Grade 1-2 classes of elementary school. The frequency of 45 fundamental movement patterns was assessed through observation by classroom teachers. The number of fundamental movement patterns showing high frequency increased from 4-year-old kindergarten classes to 5-year-old kindergarten classes, with 5-year-old children showing longer periods of activity, centered on playing activity. Second graders experienced various fundamental movement patterns during physical education class. In contrast, first graders experienced very limited fundamental movement patterns. The repertoire of various fundamental movement patterns were experienced in childhood. However, the content of the physical education classes of Grade 1 elementary school appears to not be based on experiences of kindergarten. Fundamental movement patterns that can be described overall as “exercises to trial of power” were observed at lower frequencies, with Grade 1 classes observed as especially low. In addition, results showed that there was little experience of movements such as “push,” “pull,” and “carry.”

Key words : fundamental movement pattern, kindergarten children, schoolchildren in the lower grades, physical education, observational evaluation
基礎的運動パターン, 幼稚園児, 低学年児童, 体育科, 観察評価

I 目 的

幼児の運動能力は、小学生同様 1980 年代後半以降低下が指摘され（文部科学省, 2012a ; Sugihara et al., 2006）、パフォーマンステストによる低下だけでなく（森ほか, 2010）、動きの質的な低下

もみられている（中村ほか, 2011）。体育カリキュラム作成小委員会（1980）と同じカテゴリーを用いた研究では、最近の幼児の基礎的運動パターンは 84 種のうち 7 割程度の種類しか観察されておらず（町山・吉田, 2008）、量的発達の低下も示唆されている。

このような現状の中、2012年には幼児期運動指針が策定され、その指導のポイントのひとつに多様な動きの経験があげられている(文部科学省, 2012b)。また、2008年告示の小学校学習指導要領では、低・中学年の体づくり運動領域に「多様な動きをつくる運動(遊び)」が新たに規定された(文部科学省, 2008a)。このうち低学年では「体のバランスをとる運動遊び」「体を移動する運動遊び」「用具を操作する運動遊び」「力試しの運動遊び」の4つの運動遊びで構成され、その他の領域において扱いにくい様々な体の基本的な動きを培うための運動が示されている(文部科学省, 2008a)。幼稚園教育の基本は「遊びを通しての指導」が中心であり、運動活動においても例外ではなく遊びとしての運動、すなわち運動遊びである(文部科学省, 2008b)。また、小学校低学年の運動領域は体づくり運動の他、器械・器具を使っての運動遊び、走・跳の運動遊び、水遊び、ゲーム、表現リズム遊びの5つの領域で構成され、いずれも中学年以上とは異なり領域名は「運動遊び」である。小学校体育は幼稚園とは異なる目標を持つ教科であることから、同じ運動遊びという呼称であっても幼小では指導内容や指導方法に違いはある。しかし、幼稚園で行う運動遊びと小学校体育は乖離したものではなく、運動発達の特徴をみても少なくとも様々な動き(多様な動き)を培うことにおいては共通性があるといえる。

さらに、2008年幼稚園教育要領改訂の基本的な方針のひとつには「発達や学びの連続性」があげられ、小学校以降の子どもの発達を見通した上で幼児期には学校教育全体の生活や学習の基盤を培うことの重要性が述べられている(文部科学省, 2008b)。また小学校学習指導要領においても「運動領域については、幼児教育との円滑な接続を図ること」があげられているものの、多様な動きの観点から検討されたものはみあたらない。幼児の運動能力は1980年代から90年代の約10年間で3~6カ月の低下がみられており(吉田ほか, 2002)、最近の5歳児の動きは約20年前1985年頃の3歳児と質的に同レベルである(中村ほか, 2011)ことから、子どもたちは運動発達が未熟なまま小学校に就学しているといえる。また小学校低学年ですでに運動技能の個人差や運動習慣の

違いが指摘されていることから、幼児期の運動遊びの取り組みをより充実させていく必要があるといえる。

そこで本研究では、幼稚園の教育課程で行われている運動遊びで観察される基礎的運動パターンの種類と、小学校低学年の体育で扱われているその種類を明らかにし、双方の基礎的運動パターンの相違を検討、幼児期の運動遊びを再考するための視座を得ることを目的とする。運動発達の一つの側面である基礎的運動パターンの獲得から、幼児期の運動遊びと小学校低学年の体育における動きの関連を明らかにし、発達の連続性を考慮していくことは、幼稚園での運動遊びの経験だけでなく小学校における体育科で取り扱う活動内容の再考にも寄与すると考えられる。

II 方 法

1. 対 象

東京都公立幼稚園1園とその園が併設している公立小学校1校。幼稚園(3年保育)は4歳児5歳児各2クラス、小学校は1学年2学年各3クラス(平成24年度2学年は2クラス)の担任教諭計19名。対象幼稚園から対象小学校へは5歳児のほとんどが進学し、対象小学校への就学は対象幼稚園卒園児が約半数を占める。

2. クラス担任による基礎的運動パターンの調査

体育カリキュラム作成小委員会(1980)、森ほか(2010)、日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会(2006)、また小学校学習指導要領解説体育編(文部科学省, 2008a)を参考に小学校体育で扱う動きを考慮し、45種の基礎的運動パターンチェックリストを作成した。基礎的運動パターンの実施頻度を「まったく見られなかった(0点)」「あまり見られなかった(1点)」「半数位の日数(回)で見られた(2点)」「たびたび見られた(3点)」「ほとんど毎日(回)見られた(4点)」の5段階とし、幼稚園は教育課程内の運動遊びの中での、小学校は体育授業時にクラスの子どもにみられた基礎的運動パターンについて評定を依頼した。なお、幼稚園は評定時1週間程度でみられた基礎的運動パター

ンについて、小学校は1学期間を通し体育の授業全体でみられた基礎的運動パターンの評定であった。

学年ごとに45種の基礎的運動パターン頻度得点の平均を求め、3点以上4点以下を高頻度、2点以上3点未満を中頻度、1点以上2点未満を低頻度、1点未満を頻度なしとして4つの頻度に分類した。

3. 実施時期

基礎的運動パターンの調査は、平成24年度および平成25年度の2年間にわたり1～3学期の終わりに1回ずつ、計6回実施した(2012年7月から2014年3月)。

Ⅲ 結 果

1. 幼稚園の運動遊びで観察された基礎的運動パターン

幼稚園4、5歳児の年間を通して高頻度に観察された基礎的運動パターンは、「立つ-すわる、しゃがむ」「走る」の安定・移動系の動き2種と、「つかむ」「運ぶ・動かす」「積む・のせる」の操作系3種であった。これらに加え4歳児は「止まる」「押す」など3種、5歳児は「おりる」「しばる・むすぶ」など3種も高頻度であった。また4歳児では「スキップする・はねる」「投げる」「ける」などが、5歳児では「投げる」「ぶらさがる」「うける-捕る」などが学期により高い頻度でみられ、時期による違いがあった。一方、「逆立ちする」は4、5歳児年間を通して頻度なしで、この他4歳児では「こぐ(ブランコ)など」「おぶう-おぶさる」、5歳児では「掘る」が年間を通して頻度なしであった。つまり45種の基礎的運動パターンのうち4歳児では42種、5歳児では43種が年間を通してみられた。また、5歳児は1学期から3学期にかけて高頻度の動きの種類が多くなる傾向にあり、3学期では高頻度にみられる基礎的運動パターンが45種中24種(53%)と半数以上を占めていた。これに対し、頻度なしは4、5歳児年間を通して10%前後でありほぼ一定の割合で時期による種類の違いはなかった。

2. 小学校低学年体育科で観察された基礎的運動パターン

小学校低学年体育で年間を通して高頻度に観察された基礎的運動パターンは、「走る」1種であった。これに加え2学年は幼児期と同じ「立つ-すわる、しゃがむ」の他、「追いかける-逃げる」「かわす・よける」「振る」など5種も高頻度であった。1学年は「走る」以外に年間を通して高頻度の基礎的運動パターンはなかった。2学年は「ける」「うける・捕る」「ころがす」など操作系の動きは学期によって高い頻度でみられ、時期による違いがあった。一方、「掘る」「逆立ちする」「こぐ(ブランコなど)」「こぐ(乗り物を動かす)」は、年間を通して1、2学年いずれの学期においても頻度なしで、年間を通してみれば1学年2学年とも41種の基礎的運動パターンが観察された。1学年で高頻度の基礎的運動パターンは1学期で2種(4%)、2学期6種(13%)、3学期3種(7%)と2学年および4、5歳児と比較して極めて少なかった。さらに、1学年の頻度なしの基礎的運動パターンは年間を通して30%前後で他の学年より割合が高い傾向であった。「多様な動きをつくる運動遊び」の4つの運動遊び(体のバランスをとる運動遊び、体を移動する運動遊び、用具を操作する運動遊び、力試しの運動遊び)の分類でみると(図2)、1学年は「力試しの運動遊び」に分類される基礎的運動パターンの頻度が年間を通して特に低く、頻度の高い基礎的運動パターンはみられなかった。2学年は「バランスをとる運動遊び」に分類される基礎的運動パターンの頻度が年間を通して高かった。

3. 幼稚園の運動遊びと小学校低学年体育科で観察された基礎的運動パターンの比較

各学年各学期に観察された基礎的運動パターンの頻度を図1に示した。45種の基礎的運動パターンのうち高頻度でみられた動きは、1学期から3学期にかけて5歳児で20%→40%→53%と増加していたのに対し、1学年は4%→13%→7%と年間を通して非常に少なかった。また頻度なしは5歳児11%→9%→7%に対し、1年生は33%→27%→36%と観察されない動きの種類が非常に多かった。4歳児から5歳児2、3学期にかけて高頻

図1 観察された基礎的運動パターンの頻度（学年学期による比較）

度の動きが多くなるが、1学年では極端に低くなり、2学年は高頻度の動きが20%→33%→24%と再び多く観察される傾向であった。

図2は小学校学習指導要領解説を参考に「多様な動きをつくる運動遊び」の4つの運動遊び毎に基礎的運動パターンを分類し各学年各学期に観察された基礎的運動パターンの個数を示したものである。すべての運動遊びにおいて幼児期、特に5歳児3学期は高頻度の数が約半数を占めているのに対し、1学年はいずれの運動遊びにおいても頻度なしまたは低頻度の基礎的運動パターンの数が多かった。中でも1学年1学期は、「体のバランスをとる運動遊び」「用具を操作する運動遊び」「力試しの運動遊び」では高頻度の動きがまったくみられなかった。このうち「力試しの運動遊び」が1学年の年間を通して、また2学年は2学期を除き高頻度の基礎的運動パターンは観察されておらず、児童が体育の授業の中ではあまり経験していない動き、あるいは限られた回での経験であったといえる。

IV 考 察

幼稚園では、年間を通して45種の基礎的運動パターン（以下運動パターン）のうち4歳児で42種、5歳児で43種がみられ、4歳児5歳児とも全体的にみれば多様な運動パターンが観察されていた。幼児期の運動発達は、幅広い運動パターンの獲得という量的発達と、その習熟である質的発達の2つの側面がその大きな特徴である（宮丸、1998、2011など）。このことを踏まえれば、今回対象とした幼児は発達に即した幅広い運動パターンの経験をしているといえる。4歳児は高頻度の運動パターンの数が年間を通してほとんど変化はみられないが、5歳児は学期を重ねる毎に高頻度の運動パターンが増加しており、小学校2学年と同様に高い傾向であった。この4歳児から5歳児にかけてみられる発達の傾向は、5歳児ではより遊びが多様になり、より活発に活動を広げて遊んでいくことと相互に関連しあっていると考えられる。幼稚園での評価は1週間の運動遊びに見られた動きであったにもかかわらず、多様な運動パターンが観察されていた。1週間の中でその時期

「体のバランスをとる運動遊び」に示される
基礎的運動パターン 「体を移動する運動遊び」に示される
基礎的運動パターン 「用具を操作する運動遊び」に示される
基礎的運動パターン 「力試しの運動遊び」に示される
基礎的運動パターン

■ 高頻度 (3.0~4.0) ■ 中頻度 (2.0~2.9) □ 低頻度 (1.0~1.9) □ 頻度なし (0.0~0.9)

図 2 4つの運動遊び毎に見た観察された基礎的運動パターンの頻度 (学年学期による比較)

の流行の遊びが毎日繰り返されていた可能性もあるが、遊びとしての運動が様々な動きの経験と関連していることを示すこの結果は、子どもが遊びとして行う活動であるほど様々な運動パターンを経験する頻度が高いという杉原ほか(2011)を支持するものである。また、学期により頻度が高くなる運動パターンがみられたが、これは幼稚園では流行の遊びや教師の意図的な環境の構成(たとえばお正月にはコマ回しやたこ揚げ、運動会時期にはリレーごっこやラインやバトンを出しておくことなど)が関係しているためであると考えられた。

これに対し、小学校では体育の授業において2学年は多様な運動パターンが観察されていたが、1学年は頻度の高い運動パターンが非常に少なく頻度の低い運動パターンが多かった。したがって、1学年は毎回の授業で広く様々な運動パターンを経験していたというよりは、1回の授業では限定された種類の経験であったことが示唆された。これらのことから、幼児期には多様な運動パターンのレパートリーを経験しているが、小学校1年生の体育の授業では幼児期の経験を踏まえた内容にはなっておらず、少なくとも運動パターンの面では幼児教育との円滑な接続(文部科学省, 2008a)が図られているとはいえなかった。ただし、今回は1校を対象とする2年間を通した検討で、1学年の担任は計6名であったため、実際の1学年の活動が限定的であったのかは更なる検討が必要であり、また観察者の評価の妥当性が関係していた可能性も考えられる。さらに、今回の観察は幼稚園が評定時1週間の運動遊び、小学校が1学期間の体育授業を通してみられた動きの評価であったことから、小学校においては「毎回みられる」というのは難しいことかもしれない。しかし、2学年は幼児期と同様の頻度で様々な運動パターンが観察されており1学年とは異なる傾向を示していたことから、単に幼小の活動形態、時間や時期の違いによるものではないことが考えられる。1学年の観察されにくい運動パターンについては、今後2学年との差異を考慮した内容の検討が必要であろう。

小学校では幼稚園同様、学期による違いもみられ、扱う教材や活動が関係していると思われた。

また全体的に「力試しの運動遊び」に類する運動パターンは観察される頻度は高くなく、1学年は顕著に少なかった。「押す」「引く」「おんぶする」などの動きの経験が体育では少ないことが示唆された。押すや引くは生活活動(運動以外の日常的な活動)においても見られにくくなっており、小さい子をおんぶしたり、自身がおんぶされずに育つ子もいる。したがって、様々な体の基本的な動きを培うためにはこれらの運動パターンを体育において意図的に経験させるような工夫が必要といえるだろう。

幼児期から小学校低学年の幼少年期を通して観察されやすい運動パターンとあまり見られない運動パターンがあった。前者は「立つ-すわる・しゃがむ」「走る」、後者は「逆立ちする」「こぐ(ブランコなど)」「掘る」などであった。このことは、日常的な生活場面においても人の行為として出現しやすい運動パターンと、物理的な環境の設定や場面によってしかみられない運動パターンがあることによると思われる。経験しにくい運動パターンについては、幼稚園ではそれらの運動パターンを含む遊びの提案やそれらの運動パターンが引き出される環境の構成により経験させるという工夫も必要といえる。

本研究は、幼児期の運動能力低下が指摘され、小学校低学年でもすでに運動技能の個人差や運動習慣の違いが指摘されている中、幼児期の運動遊びを再考するための視座を得ることが目的であった。幼児期には観察されにくい運動パターンがあったものごとくわずかで、多様な運動パターンが観察されており、量的な運動パターンの経験では幅広く活動が展開されていることが考えられた。しかし、動きの質的低下の現状を踏まえれば(中村ほか, 2011)、今後は運動パターンの経験の量(繰り返し)やバリエーション(「とぶ」であれば高く、遠くに、リズムカルになど)のある運動パターンの経験も必要といえるだろう。一方、小学校では1学年で幼稚園での経験が基盤になっていないことが示唆された。白旗(2013)は、体育科の運動領域にのみ検定教科書がないことから18,000名以上の小学校教員を対象に文部科学省の発行物・資料の活用状況を明らかにしている。このうち文部科学省資料では、学習指導要領解説

が男性教員で57.2%, 女性教員で40.4%が利用したことがあると回答し, 多様な動きをつくる運動(遊び)パンフレットは男性教員27.7%, 女性教員23.7%の利用であった。解説の利用率は文部科学省資料の中では最も高かったが, 割合でみればおよそ半数は利用しておらず, 多様な動きをつくる運動(遊び)パンフレットの利用も3割にも満たないことから, 小学校教員が多様な動きの認識をどの程度もっているのか疑わしい。さらに体育の指導が難しい点においては圧倒的に指導方法が多かったのに対し, 人間関係づくりや教材研究はいずれも5%以下の回答であった(白旗, 2013)。幼児教育の現場では, 子どもが主体的にかかわり多様な動きを引き出す環境を構成し, 教師や友だちの存在や役割を考慮した環境や教材の扱いなどの工夫をしている。小学校では幼稚園との指導方法に違いはあるが, 幼児期の経験を踏まえた取り組みを展開していくとともに, 指導が困難な点では意識の割合が低かった人間関係づくりや教材研究を見直していくことが多様な動きを引き出すことにつながるという視点も必要なのではないだろうか。

付記

本研究はJSPS 科研費 24500693 の助成を受けたものです。

文 献

- 町山太郎, 吉田伊津美 (2008) 幼児の運動能力と園での好きな遊びの時間に見られる基本的動作との関連, 日本発育発達学会第6回大会抄録集, 48
- 宮丸凱史 (1998) 運動能力の発達バランス, 体育の科学, 48, 699-705
- 宮丸凱史 (2011) 子どもの運動・遊び・発達: 動きの育てる子どもに育てる, 学研教育みらい, 20-21
- 文部科学省 (2008a) 文部科学省学習指導要領体育編, 東洋館出版
- 文部科学省 (2008b) 幼稚園教育要領解説, フレーベル館
- 文部科学省 (2012a) 子どもの体力向上のための取組ハンドブック, 7-9
- 文部科学省 (2012b) 幼児期運動指針
- 森司朗, 杉原隆, 吉田伊津美, 筒井清次郎, 鈴木康弘, 中本浩揮, 近藤充夫 (2010) 2008年の全国調査からみた幼児の運動能力, 体育の科学, 60, 56-66
- 中村和彦, 武長理栄, 川路昌寛, 川添公仁, 篠原俊明, 山本敏之, 山縣然太郎, 宮丸凱史 (2011) 観察的評価法による幼児の基本的動作様式の発達, 発育発達研究, 51, 1-18
- 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会 (2006) 幼少年期に身につけておくべき基本運動(基礎的動き)に関する研究, 平成17年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告I, 1-73
- 白旗和也 (2013) 小学校教員の体育科学学習指導と行政作成資料の活用に関する研究, スポーツ教育学研究, 32 (2), 59-72
- Sugihara, T., Kondo, M., Mori, S. and Yoshida, I. (2006) Chronological change in preschool children's motor ability development in Japan from the 1960s to 2000s, International Journal of Sport and Health Science, 4, 49-56
- 杉原隆, 吉田伊津美, 森司朗, 中本浩揮, 筒井清次郎, 鈴木康弘, 近藤充夫 (2011) 幼児の運動能力と基礎的運動パターンとの関係, 体育の科学, 61, 455-461
- 体育カリキュラム作成小委員会 (1980) 幼稚園における体育カリキュラムの作成に関する研究I: カリキュラムの基本的な考え方と予備調査の結果について, 体育科学, 8, 150-155
- 吉田伊津美, 杉原隆, 森司朗, 近藤充夫 (2002) 幼児の運動能力の年次推移, 体育の科学, 52, 29-33 (受付: 2014年9月30日, 受理: 2015年9月11日)

吉田 伊津美 (よしだ いづみ)

現職: 東京学芸大学総合教育科学系
幼児教育学分野准教授

東京学芸大学大学院教育学研究科保健体育専攻修了, 修士(教育学)。福岡教育大学を経て2005年より現職。専門は, 領域教育学(健康), 体育心理学。幼児期にふさわしい運動の在り方とその指導をテーマに研究を行っている。

主な著書: 「幼児期における運動発達と運動遊びの指導—遊びのなかで子どもは育つ」(共著・ミネルヴァ書房)。